

2019  
おもろ  
チャレンジ

## トルコの手工芸に見る人と植物との関わり

－トカット地方のバスクに用いられる文様と染料－

農学部 2年

坪田 七海

トルコ

2020年2月12日-

2020年3月6日



### 渡航概要と内容

#### ○行程

2月12日に入国し、トラブゾンという黒海沿岸の都市に滞在したのち、トカット地方に移動し10日ほど滞在した。そののちサフランボルという町に4日ほど滞在し、イスタンブールに移動し3月6日に帰国した。

#### ○当初の渡航目的

当初の渡航目的は、栽培コムギの祖先種が見られるトルコの農村において、人々の暮らしはどのようなものであるか、またどのような魅力があるかを、その土地の自然物を用いて染料や顔料を作り絵画や工芸で表現する、というものであった。しかし、2、3月にコムギの栽培風景を見ることは難しいだろうと予想していたので、その土地に栽培の起源をもつなど古くから人と関わりのある植物が、手工芸のモチーフや染色の材料として使われている例から、植物と人との関わりをみてとることを考えていた。

#### ○実際に現地で行えたこと

トカット地方には600年の歴史のある伝統工芸バスクがあり、これは型を彫った木版に染料をつけて布に押しつけて製作するものである(写真1)。数十年前までは大規模な染色場がトカットにくつつか存在したが、現在はその目的で稼働しているものはない。今回私は、個人で製作している職人の工房や、複数人を雇用して経営している工房(写真2)や、手で木版を押しだけでなく機械で

版を押していく大規模な工場など、バスクを製作する様々な現場を訪ねることができた。様々な製作者の話を聞いたり、製作の様子を見たり、自分で製作してみたりするうちに、私の関心は、実際に製作するときの感覚はどのようなか、製作者はどのような思いでバスクに携わっているのか、木版の文様に込められた思いはどんなものなのか、などが主であることが分かってきた。特に、人と植物との関わりをバスクにみようとすると、木版型に彫られた植物のモチーフ（写真3）や植物染料に着目することができる。ある植物種において、バスクに限らずタイルや銅製品にも文様として描かれていたり、高度に抽象化された文様があったり、現在でも新しく考案される文様があったりと、生活に浸透し人との関わりが深いように感じられるものがあった（写真4）。また、伝統的には植物染料が用いられていたが、現在の主流は化学染料であることが実際に工房を訪ねることで分かった。しかし、個人宅には100年ほど前に植物染料で染められたバスクが保存されていたりすることもあった。



写真1：木版で彩色まで施したバスク



写真2：筆で彩色する様子



写真3：コムギがモチーフの文様



写真4：様々なパターンがあるチューリップの文様

### ○渡航中のトラブルや苦勞したこと

渡航前は現地におけるつてがないことを不安に感じていたが、手工芸がみられるというトカットにあたりをつけ赴いてみると、宿の人のつてで、手工芸業界に顔がきき現地ガイドの役割を担ってくれる人を見つけることができた。今回はトルコ人の人とのコミュニケーションの垣根が低

いところや、他人に救いを出すことを美德とする考えや、親日的な態度に大いに救われた。これによって困ったということではないが、予想と大きく違い戸惑いはした。

3月に入りイスタンブールで宿を予約する際に、新型コロナウイルスが心配だからという理由で断られたり、特に理由を告げられず断られたりし、その日の宿泊場所に困ることがあった。それまでの滞在で仲良くなったトルコ人に相談したところ、宿を紹介してもらえた。

帰りの飛行機の韓国経由の便が新型コロナウイルスの影響で欠航になったため、航空券を購入しなおした。

## 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今回、自分の知りたいことに関して、様々な人に出会い話を聞き体験してみることができたのは、すべて現地で顔のきくガイドの役割を担う人に出会えたおかげである。私はたまたま運が良かったのか、それともトルコでは一人知り合いができるとつてがどんどん広がっていくのが普通なのかはわからないが、いずれにしても知りたいことに関して造詣の深い、いろいろなつてをもつキーパーソンに出会うことが大切であると学んだ。そのために渡航前に現地のつてを確保しておくのが安全策だろうと感じた。

現地の人とコミュニケーションをとってフィールドワークを進める中で、細かいことにこだわって知りたいことに固執するより、出会う人たちが与えてくれる情報や自分がその場で感じ取れることに意識を集中し、受容していったほうが合理的であるように感じた。あらかじめ知りたいと思っていたことだけでなく、現地で知りえることすべてを吸収する姿勢でいると、現地の文脈の中で各事象や知りたかった情報がどの位置にあるのかまで大局的に把握することができるように感じた。また、自分の考え方を保持するより現地の人たちのペースに合わせることで、人間関係が円滑で円満になり、これがフィールドワークを行う上で大事なことであるように思えた。

## 今回の経験をどのように今後生かしていくか

植物文様のありかたにも複雑で奥深いものがあり、人と植物との関わりの現れであるという見方からさらに詳しく把握することができるのか、疑問が残った。今後文献で、ある植物の文様の様々なパターンとその意味するところに関して調べていきたい。そして、今回渡航先に限らずその土地にはその土地に根差した植物とそれに由来する文様があると予想がついたので、どこにいても文様に注目してみることで、手工芸に現れる人と植物との関わりに関する知識を深めたい。

また、今回話を聞くことのできた職人たちはみな、好きだからこの職を選んだと話していた。そのように生きる姿勢が素敵だと思ったので、今後の人生の参考にしたい。



## 本プログラムでの渡航を考えている学生へのアドバイス

渡航予定の国に行ったことのある人の話をきくのが、渡航準備をするうえで最も役に立つことかもしれない。現地で活動をする上で何を押さえておけばよいのか教えてもらえていれば、活動が順調に進むだけでなく潜在的な危険を防ぐことにもつながる。少しでも事前情報を与えてくれる人には進んで話を聞きに行くことをすすめる。

## 主な奨学金の使途

- \*渡航費
- \*宿泊費
- \*現地交通費、雑費
- \*海外旅行保険 など



バスクに関する技術について話を聞く



アトリエでバスクを体験する



バスクの木版を彫っている様子



かつての大規模な染色場は現在ホテルとして運営されている